

西洋中世学会第13回大会（2021年）

ポスター・セッション報告要旨

1 伊藤 喜彦 Yoshihiko ITO（東京都立大学）

イベリア半島イスラーム都市のキリスト教化プロセス再考—建築と都市構造の変容パターン—
Rethinking the Christianization Process of Iberian Islamic Cities
—Transformation Patterns in Architecture and Urban Structure—

11世紀末から15世紀末にかけてキリスト教諸勢力の軍門に降ったイベリア半島イスラーム圏（アンダルス）の都市の多くは、中世後期以降も各地方における中核都市として継承され、現在に至る。本発表は、こうした都市のキリスト教化プロセスにおいて、イスラーム都市の空間構造や大モスクなどの都市建築がどの程度継承され、いつ、どのように改変・破壊されていったかを典型的に整理する。これにより、既往研究に見られる、アンダルス都市像を一意的な静的なモデルとして一般化する見方を補正することを目指す。

2 江原 拓海 Takumi EBARA（岡山大学大学院）

ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』における編集(compilatio)とその司牧的意図—「砂漠の師父」伝を中心に—
The *Legenda Aurea* of Jacobus de Voragine and his Pastoral Intention in its Compilation:
A Case Study on the Lives of “Desert Fathers”

13世紀後半にドミニコ会士ヤコブス・デ・ウォラギネが編纂した聖人伝集『黄金伝説』について、研究史では複数の聖人伝／教父テキストを改変して引用し、一つの伝記に再構成するというヤコブスの編集 (*compilatio*) の技術が注目されてきた。ただし、そうした編集技術の評価を前提とした、各聖人伝の内在的な分析はいまだ十分ではない。本報告では「砂漠の師父」と呼称される一連の聖人伝を題材にとり、同時代の聖人表象の変化やヤコブス自身が著した範例説教を補助線にして、その司牧的意図のさらなる解明を試みる。

3 三浦 麻美 Asami MIURA（東洋大学）

メヒティルトからゲルトルートへ：ヘルフタ修道院における *littera*
From Mechtild to Gertrude: Littera in Helfta

13世紀末ドイツのシトー会女子修道院ヘルフタの修道女だったハッケポルンのメヒティルト、ヘルフタのゲルトルートの著作をもとに女性と神学の関係について考察する。当時は大学が登場し、スコラ神学の全盛期であったが、高等教育を受ける機会のない女性が神学書をどのように読み、自らの宗教実践に取り入れようとしたのか、*littera*（文字、言葉）をキーワードに考察する。

4 有信 真美菜 Mamina ARINOBU (東京大学)

ハンガリーのクリングゾールはどのようにしてトランシルヴァニアからアイゼナハに来たのか？

「ヴァルトブルクの歌合戦」伝説を補完するものとしての聖人伝及びテューリングゲンの年代記

How did Klingsor von Unterland come from Transylvania to Eisenach?—Forming and Completing the
“Wartburgkrieg”-Legend in the hagiographies and the Thuringia Chronicles—

13世紀から15世紀にかけて成立した作品群である『ヴァルトブルクの歌合戦』は、第1部「君主礼賛」と、第2部「謎々遊び」が一連の「ヴァルとブルクの歌合戦伝説」として一つの物語を形成し、更にテューリングゲン方伯妃から高名な聖人となった聖エリザベートの誕生と結び付けられ、聖人伝及び年代記にテューリングゲンの宮廷での実際の出来事として記された。この中で元の作品では欠けている要素、特に第2部の重要人物ハンガリーのクリングゾールがどのようにしてテューリングゲンへ招聘され、辿り着いたかの「物語」が補完されている。

5 高橋 香里 Kaori TAKAHASHI (東京藝術大学)

西洋中世の青色人工顔料の処方 (レシピ) について

The Artificial Blue Mentioned in Medieval Treaties in Europe

西洋中世において、青色は貴重な色材であった。鮮やかな色彩の鉱物由来の顔料は非常に高価であり、入手しやすい植物由来の染料は色彩に問題があったからである。それゆえ、青色顔料を作る処方が数多く存在していた。しかし、青色人工顔料が実際に使用された美術作品がほとんど現存していないため、処方の信頼性は定かではない。そこで本報告では、14世紀イングランドの技法書 Trinity College Manuscript の処方を材料学的に考察することで、記載された材料、手順で青色を合成できるのか明らかにしたい。

6 井上智也 INOUE Tomoya (岐阜県公立高等学校 地歴公民科)

16世紀ドイツ木版画ピラにおける「オーロラ」表象—Wickiana 収録の事例を中心に

“Aurora” in 16th-Century German Woodcut Broadsheets – A Case Study on the Wickiana Collection

16世紀後半、Wunderzeichen (奇跡のしるし) として幻日幻月・彗星などの大気・天文現象を報道するピラが多く出版され始める。このような自然現象についてのピラは Wickiana コレクションの26.6%を占め、その他のトピックに比べて多く、当時のドイツ語圏における関心の変化を反映していると思われる。この歴史的背景について、特に「オーロラ」の出現を伝えるピラの図像と文章を通時的に分析する。この際、①同時代人によるオーロラの特徴・変化、②シュペーラー極小期終了後の太陽活動の変化を巡る自然科学的分析への本史料の価値、の二点に焦点を当て議論する。

7 福田智美 FUKUDA Tomomi (東北大学大学院 文学研究科西洋史研究室博士後期課程)

エリザベス 1 世期における枢密顧問官の活動頻度

How Often did the Privy Councilors Attend the Conferences in Elizabethan England?

エリザベス 1 世治下に枢密院は国王に対する助言機関であったが、少数精鋭であり、さらに地方官職保有者など出席しない人がいるとされてきた。また、近年は、枢密顧問官ではなく、それ以外に側近による助言に注目が集まっている。そのような研究状況に対して、枢密院に実際に出席した人は誰であり、どの程度出席していたのかを探ることで、枢密院の活動の実態にせまる。

本発表では、Acts of Privy Council の署名を元に、いつ、誰が枢密院に参加していたのかを明らかにする。それを元に、枢密顧問官の会議への参加の頻度や傾向を明らかにする。

8 加藤 政夫 Masao KATO (学習院高等科)

高等学校の世界史における西洋中世史—その可能性と限界—

事例⑩「中世と近世が混同されやすいのは何故か？」

European Medieval History in High School History Education:

Why Do People Confuse the Medieval Period with the Early Modern Period?

「なぜ、中世と近世は混同されやすいのか?」。昨年の大会において津田拓郎氏が行った問題提起のなかで、高校を卒業したての大学生たちの間で、西洋の「中世」と「近世」とが混同されがちな現状が指摘された。今回のポスター報告は、これに応えるかたちで、高校の世界史教育を受けた人々の間にこうした混同が多く見られる理由について報告者なりの考えを報告し、津田氏によって提起された問題を学会全体で考えてゆく上での一助となることを目指す。

9 大貫 俊夫 Toshio OHNUKI (東京都立大学)

『中世ヨーロッパ ファクトとフィクション』と歴史教育の実践

The Middle Ages: Facts and Fictions and the Practice of History Education

本報告では、先だって刊行されたウィンストン・ブラック『中世ヨーロッパ ファクトとフィクション』（平凡社）を大学や高校の歴史教育に活用する手立てを考察する。本書は「中世は暗黒時代だった」など 11 の歴史認識を扱い、それぞれについて①フィクションの概要、②その成立過程、③その認識を支える史料的根拠、そして④実際に起きたこと、⑤その認識を支える史料的根拠、を提示する。教員のファシリテーションとグループワークによってこれらを段階的に消化し、学生・生徒は、歴史認識がどのように導かれるか、なぜ中世ヨーロッパがフィクションの宝庫となっているのかなどを深く理解するだろう。